

處置、根を小石などにてとめおく、卵をうみつくれば其藻を他の器にうつし、日あたりに出しあた、む、玄からざれば魚ども卵を食ふ、魚苗はそり毛の如し、雞卵をゆで、黄みをときて與ふ、やや育ちたるには、みじん子とてほうぶりの子、糠の如細なる虫溝中にあるを采て飼、その後常の紅虫を與ふ、魚は諸品とともに始はみな黒し、やうく色變りて黄になり赤くなる、金色は黒き時よりあり、

〔用捨箱中〕鎮鑰屋の金魚

江戸鹿子貞享四年に、金魚屋下谷池の端玄んちう屋重左衛門と記し、又同所に地張きせる屋、玄んちう屋市郎右衛門とあれば、重左衛門も原は烟管屋にてありしなるべし、

向之岡延寶八年 納涼 影涼し金魚の光り鎮鑰屋

延寶中より名高き金魚商人なりし事、此句にて知らる略中

再云、此置土產○元祿六年印本の目録に、金魚が狂言もふるしといふ事あり、是より前元祿紀年に刊行せし風流盛衰記に、又の日は金魚を生舟にあつめ狂言をさせけるが、是もつひ水にしてといふ事又あり、按るに金魚の狂言とは、彼魚水中に宛轉し、踊り狂ふさまする事か、今菊を植る者狂ひ咲して花形の變するを、藝があるといふ類ひにやあらん、此事發句には古く見えたり、左に抄出、

〔新續犬筑波集萬治三年季吟撰〕をどれるや狂言金魚秋の水

松滴

〔西鶴置土産〕人には棒振虫同前に思はれ、

黒門より池の端を歩むに、玄んちう屋の市右衛門とて、隠れもなき金魚銀魚を賣るものあり、庭には生舟七八十も排べて、溜水清く浮藻を紅潛りて、三ツ尾働き詠なり、中にも尺に餘りて鱗の照りたるを、金子五兩七兩に買求めて行くを見て、又遠國に無い事なり、是なん大名の若子様、御